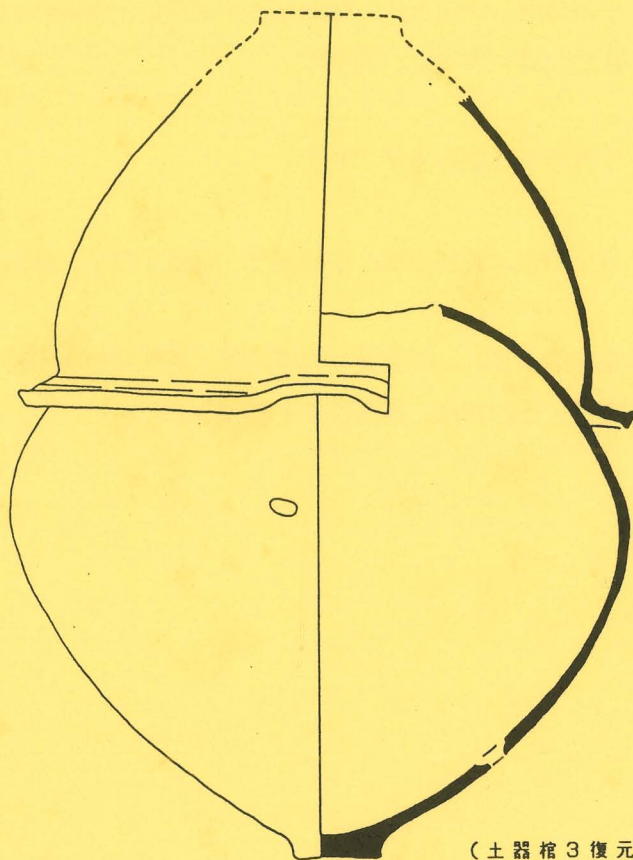


常全日蓮寺遺跡の調査

—防火水槽設置工事に伴う遺跡確認調査—



(土器棺3復元模式図)

1995年4月

太子町教育委員会

例言

1. 本書は、兵庫県揖保郡太子町常全字日蓮寺178 番地における防火水槽設置工事に伴う遺跡確認調査の概要報告である。
2. 調査は、平成6年3月3日に実施したものである。
3. 調査は、太子町教育委員会が主体となり、同社会教育課三村修次、海野浩幸が担当した
4. 調査、整理作業にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。(五十音順、敬称略)

調査作業員

小野八郎、小野博由、小松正夫、塚原進、中島捨信、西脇勇、藤井昭子、藤井実、
三浦史郎、宮田昭男、大和正、山本栄

調査補助員

小山真紀、中村幸子（龍谷大学1回生）

整理作業員

伊藤慶子、井上幸余、岩村千穂、中村豊子、森崎千恵子、森田朝子

調査協力者

村瀬孝（常全自治会長）、成真土木株式会社、株式会社前田組

5. 本書の執筆・編集は、三村修次、海野浩幸が担当した。

本文目次

例言

調査に至る経過	2
調査の概要	2
その他の弥生遺物	15
まとめ	16

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	1	第12図 遺物実測図4 (土器棺4)	9
第2図 調査位置図	2	第13図 遺物実測図5 (土坑出土遺物1)	10
第3図 遺構配置図	3	第14図 遺物実測図6 (土坑出土遺物2)	11
第4図 土層断面図	3	第15図 遺物実測図7 (土坑出土遺物3)	12
第5図 遺構実測図1 (土器棺1)	4	第16図 遺物実測図8 (土坑出土遺物4)	13
第6図 遺構実測図2 (土器棺2)	4	第17図 遺物実測図9 (土坑出土遺物5)	14
第7図 遺物実測図1 (土器棺1)	5	第18図 遺物実測図10	
第8図 遺物実測図2 (土器棺2)	5	(土器棺1周辺出土遺物)	15
第9図 遺構実測図3 (土器棺3)	6	第19図 遺物実測図11	
第10図 遺物実測図3 (土器棺3)	7	(土器棺4周辺出土遺物)	15
第11図 遺構実測図4 (土器棺4)	8		

表目次

表1 弥生遺物観察表	17
------------	----

図版目次

図版1 (上) 調査地全景	
(下) 土器棺全景	
図版2 (上) 土器棺1検出状況	
(下) 土器棺2検出状況	
図版3 (上) 土器棺3検出状況	
(下) 土器棺4検出状況	
図版4 土器棺4底部(7)粉痕跡	



第1図 周辺遺跡分布図（航空写真1989年）

- | | |
|---------|-------------|
| 1. 調査地 | 4. 阿曾南遺跡 |
| 2. 常全遺跡 | 5. 阿曾北遺跡 |
| 3. 老原遺跡 | 6. 常全古墳（消滅） |

常全日蓮寺遺跡の調査

1. 所在地

兵庫県揖保郡太子町常全字日蓮寺178 番地

2. 調査主体者

太子町教育委員会

3. 調査担当者

三村修次、海野浩幸

4. 調査期間

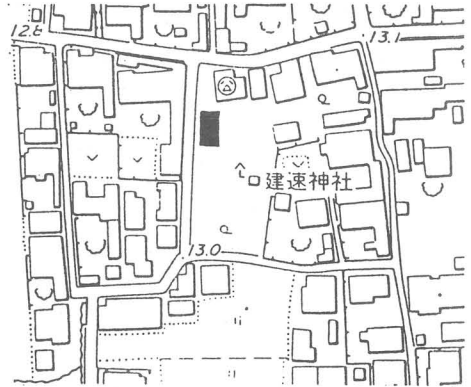
平成6年3月3日

5. 調査面積

40m²

6. 記録作成

遺構平面実測図 (1/10・1/20・1/100)、土層断面図 (1/20)、遺物実測図 (1/1)、
写真 (モノクロ/カー35mm ・ カラーリバーサル35mm ・ カラー6×7cm 版)



第2図 調査位置図 (1/2,500)

7. 調査に至る経過

今回太子町生活環境課による防火水槽設置工事が、太子町常全字日蓮寺178 番地に所在する建速神社境内において実施されることになった。工事予定地は常全集落の南よりに位置し周辺は全て宅地となっており、遺跡の存在を裏付ける遺物等の散布は認められない。しかし北方約200mの地点には、山陽新幹線建設に先立ち発掘調査が実施された常全遺跡が所在することから、当該地域にも遺跡の範囲が及んでいることが考えられるため、立会い調査を実施することにした。

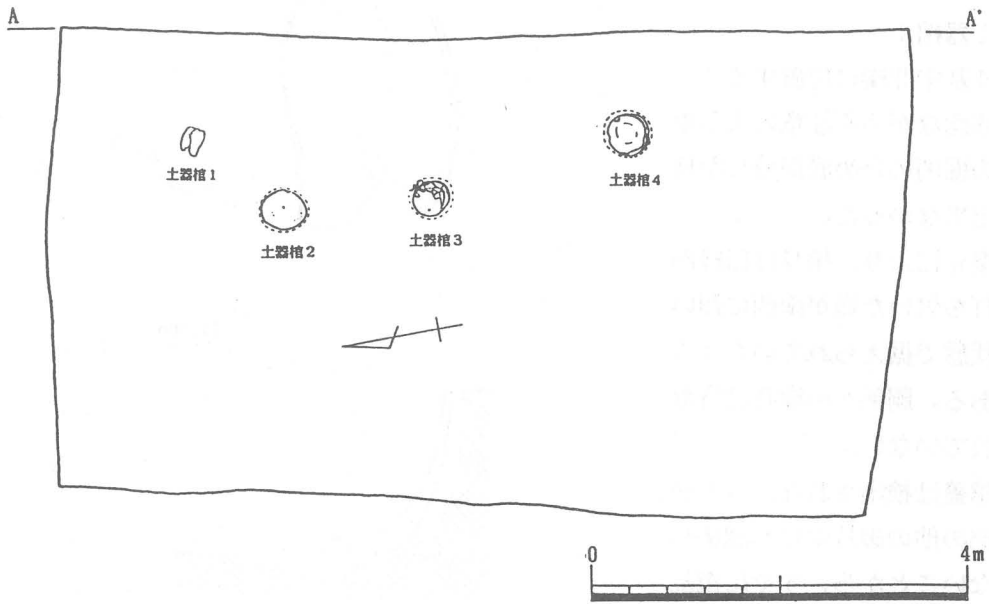
8. 調査の概要

調査は、防火水槽を設置する5×8 mの範囲を実施した。

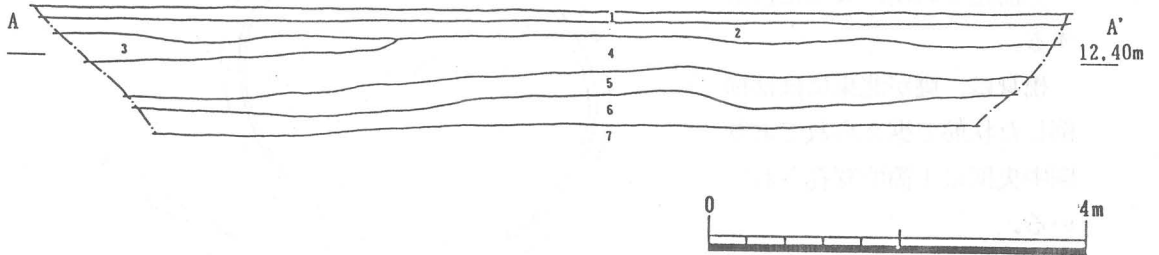
調査地は、表土 (30cm)、盛土 (30~40cm) で礫混り淡褐色土となっており、この土層上面で瓦、染付け陶磁器片を多量に包含した土坑1基が検出された。

土層の状況からこれより下層には遺構の存在は無いものと判断し、重機により土層の断ち割りを実施したところ、地表下約1.3m地点の淡褐色砂礫土上面から弥生式土器片が出土したため、急遽重機による掘削を中止し精査したところ、弥生式土器の埋納されているのが1箇所確認された。その状況から土器棺と判断し、さらに周辺部を精査したところ新たに3基を検出し、合計4基の土器棺を検出するに至った。

土器棺はゆるい弧を描いて並んでいるように認められたが、砂礫土層中に埋納されていたため、精査したがいずれも掘り方を検出することは出来なかった。



第3図 遺構配置図



- 1 表土
- 2 盛土
- 3 礫混り褐色土 (江戸末土坑埋土)
- 4 礫混り淡褐色土
- 5 小円礫混り暗灰褐色土
- 6 淡褐色細砂礫土
- 7 淡褐色砂礫土

第4図 土層断面図

土器棺 1

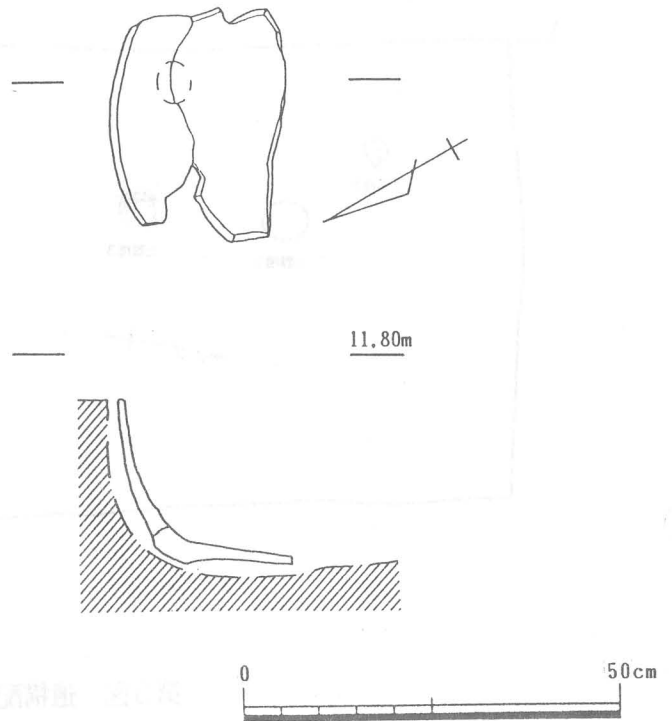
4基中北端に位置する。

残念ながら不注意による重機の掘削のため底部分しか検出出来なかった。

復元により、棺身は口縁部を打ち欠いた壺が南西に傾いた状態で据えられていたようである。胴部への穿孔は行なわれていない。

棺蓋は検出されなかったが、胴部その他の破片中にも認められないことから、すでに攪乱により失われていたものと考えられる。

人骨、副葬品は検出されなかった。



第5図 遺構実測図1 (土器棺1)

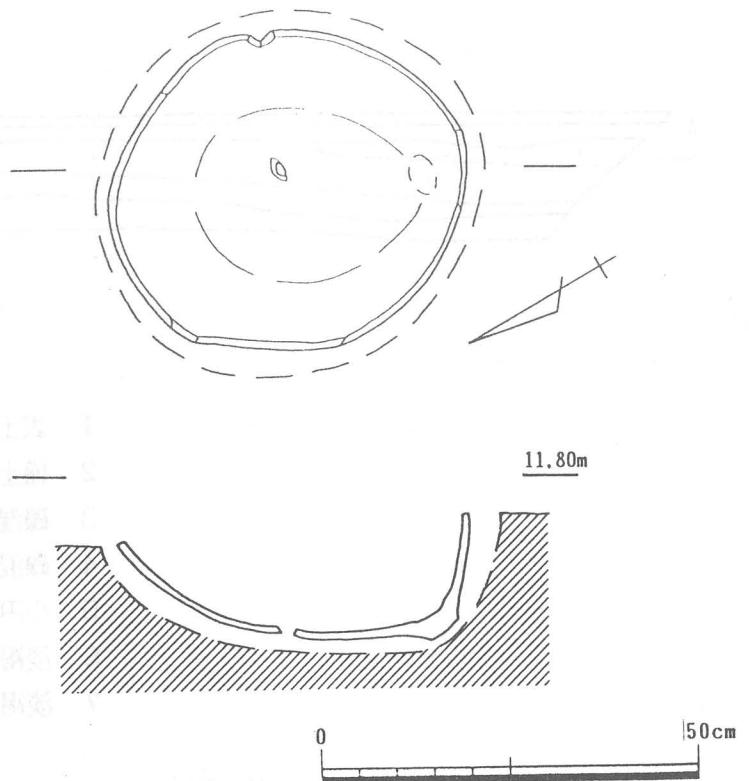
土器棺 2

土器棺1の南西80cmに位置する。

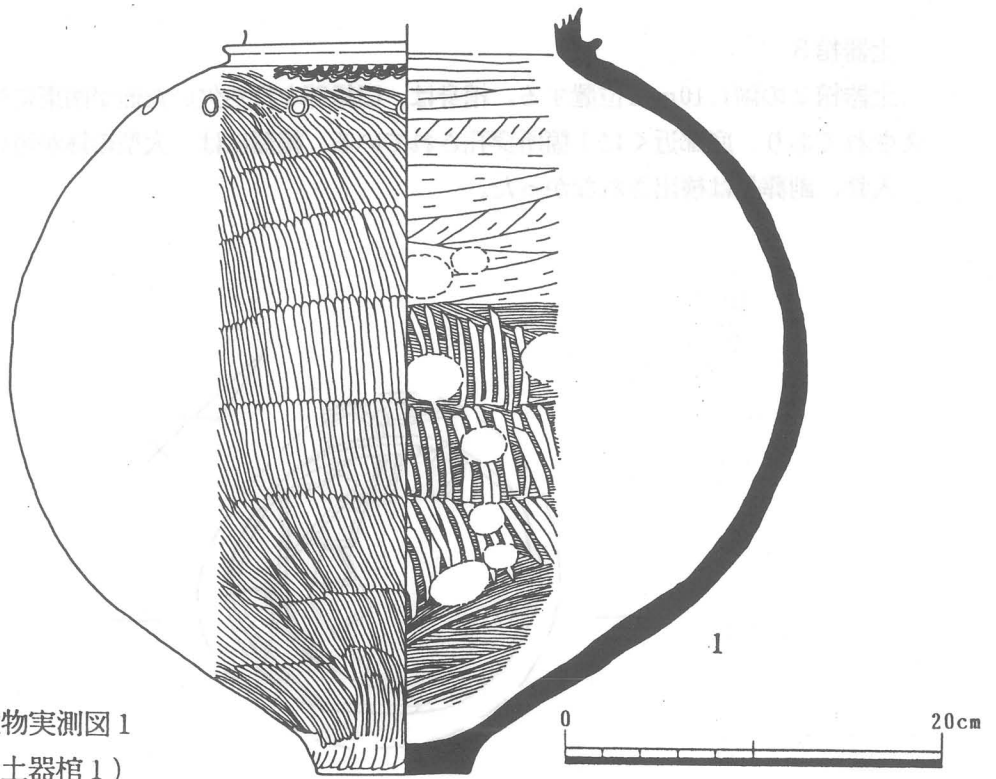
棺身は、甕が北東にほぼ横倒した状態で据えられており胴中央部に1箇所穿孔されている。

棺蓋は検出されなかった。

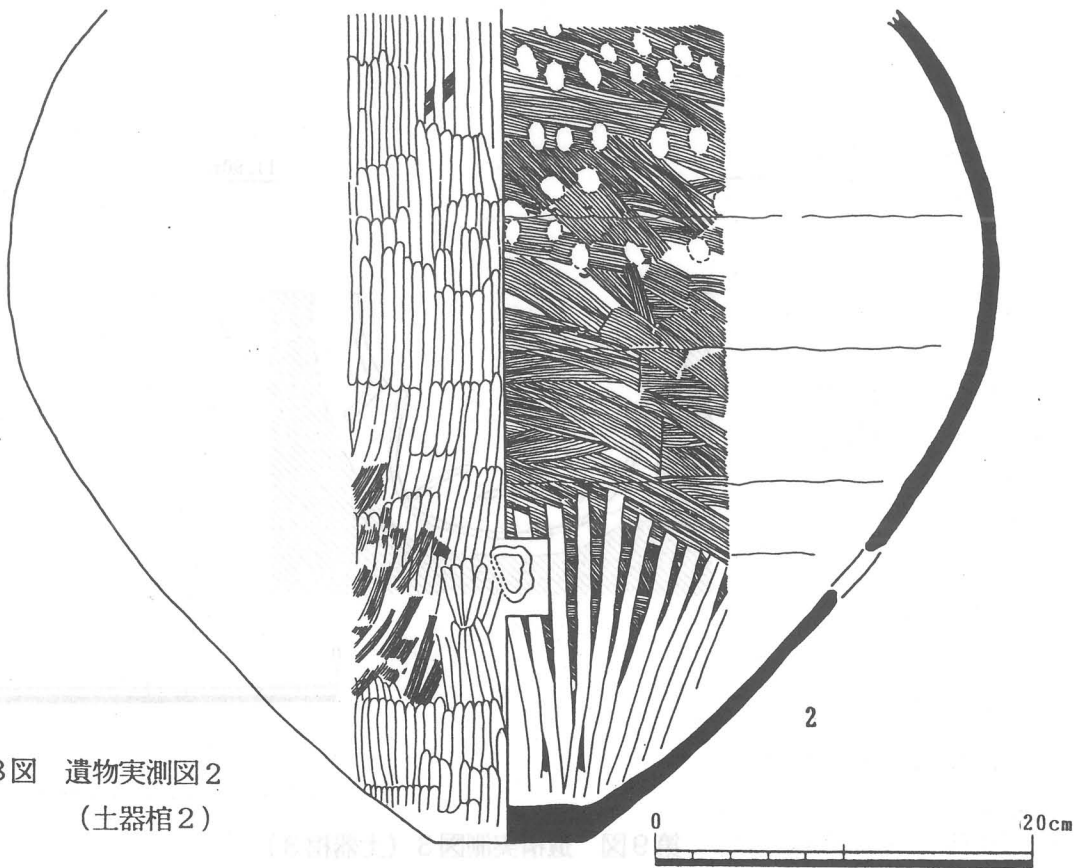
人骨、副葬品は検出されなかった。



第6図 遺構実測図2 (土器棺2)



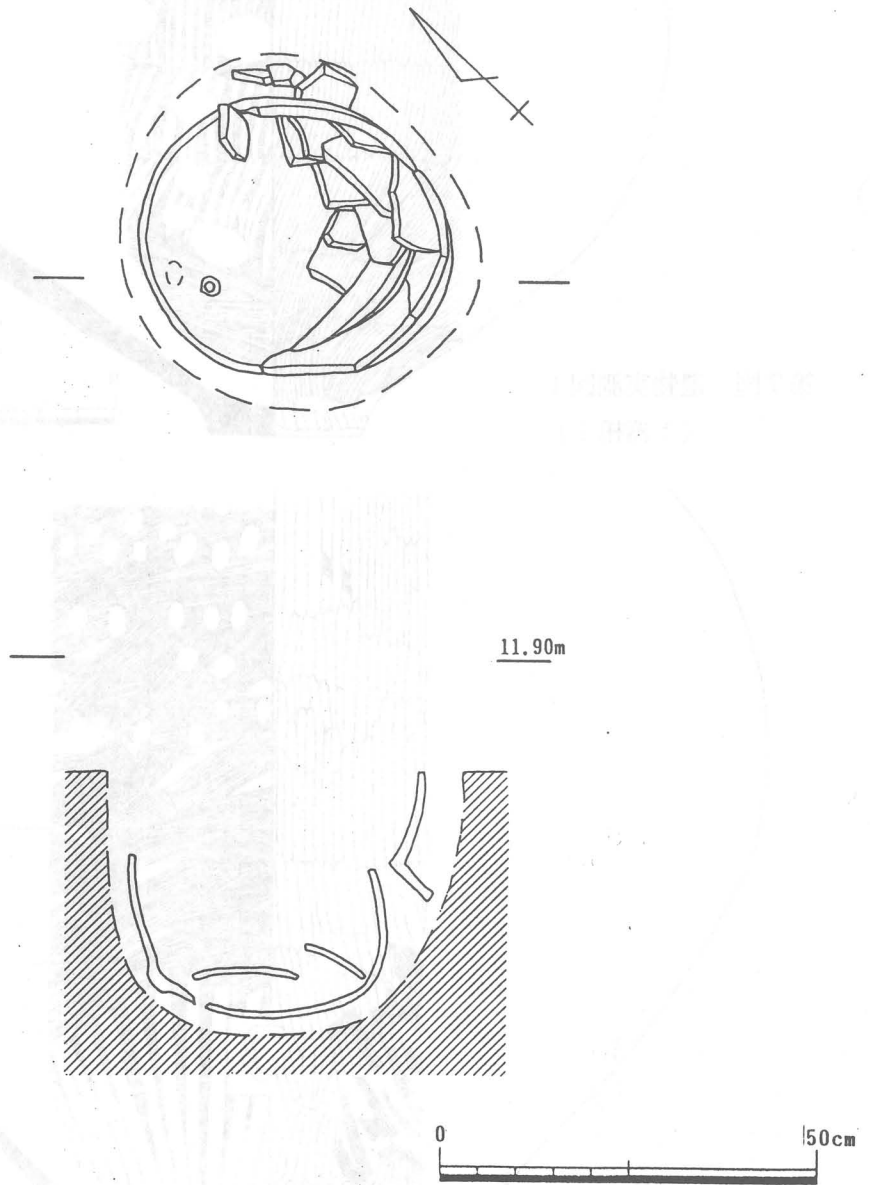
第7図 遺物実測図1
(土器棺1)



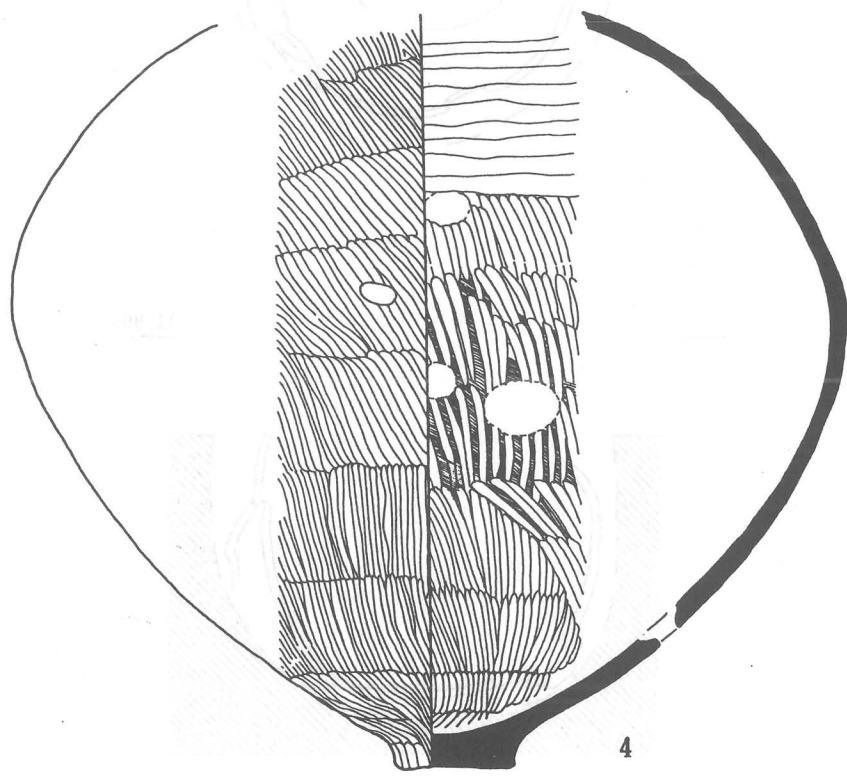
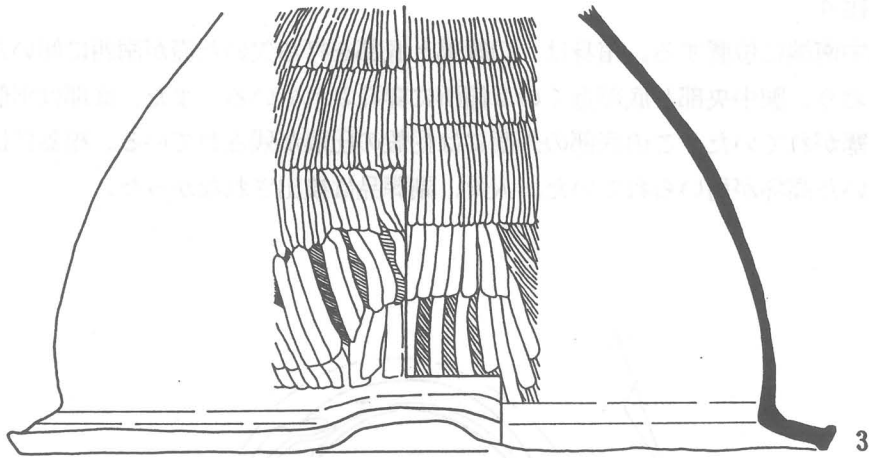
第8図 遺物実測図2
(土器棺2)

土器棺3

土器棺2の南1.10mに位置する。棺身は、口縁部を打ち欠いた壺が南東に傾いた状態で据えされており、底部近くに1箇所穿孔されている。棺蓋には、大型の鉢が用いられていた。人骨、副葬品は検出されなかった。



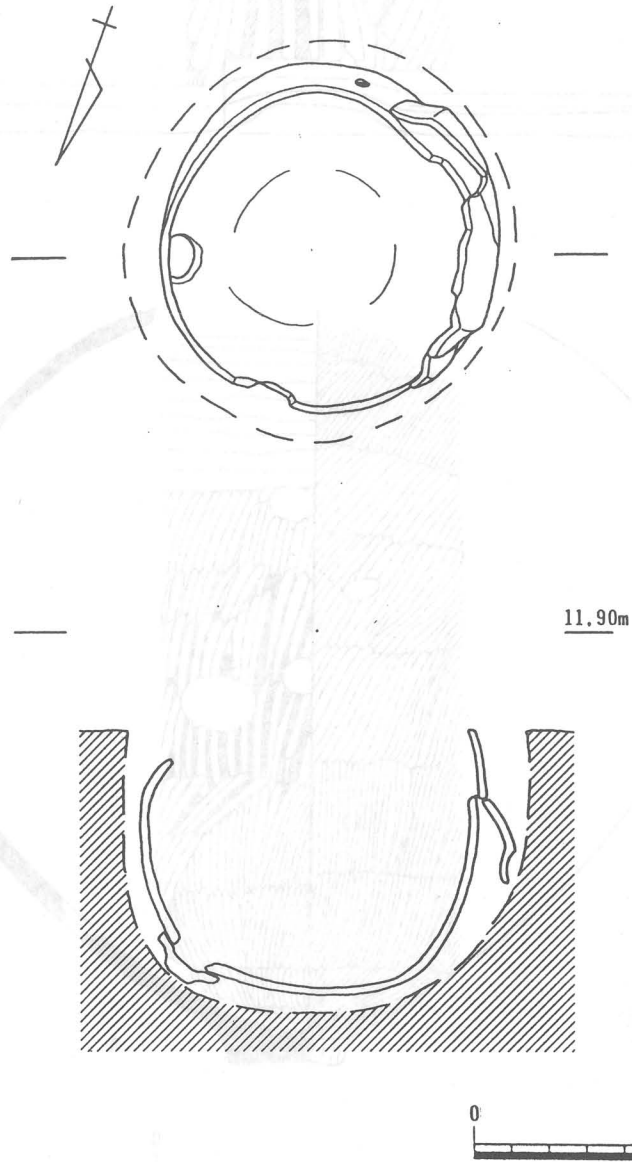
第9図 遺構実測図3 (土器棺3)



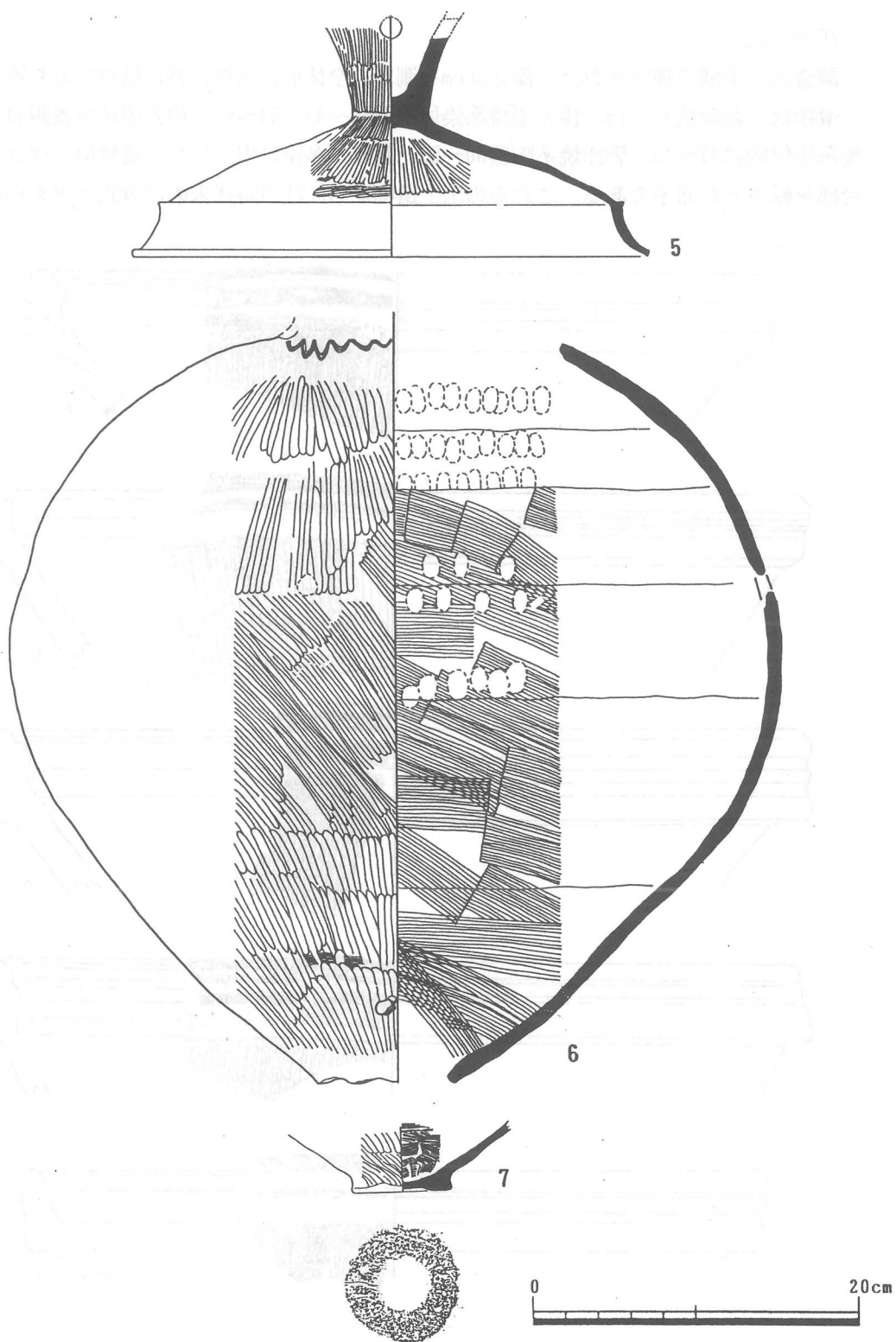
第10図 遺物実測図3 (土器棺 3)

土器棺 4

4基中南端に位置する。棺身は、口縁部と底部を打ち欠いた壺が南西に傾いた状態で据えられており、胴中央部と底部近くの2箇所穿孔されている。また、底部は別個体の底部を用いて塞がれていた。この底部の外面には粉殻の圧痕が残されている。棺蓋には、脚裾部を打ち欠いた高環が用いられていた。人骨、副葬品は検出されなかった。



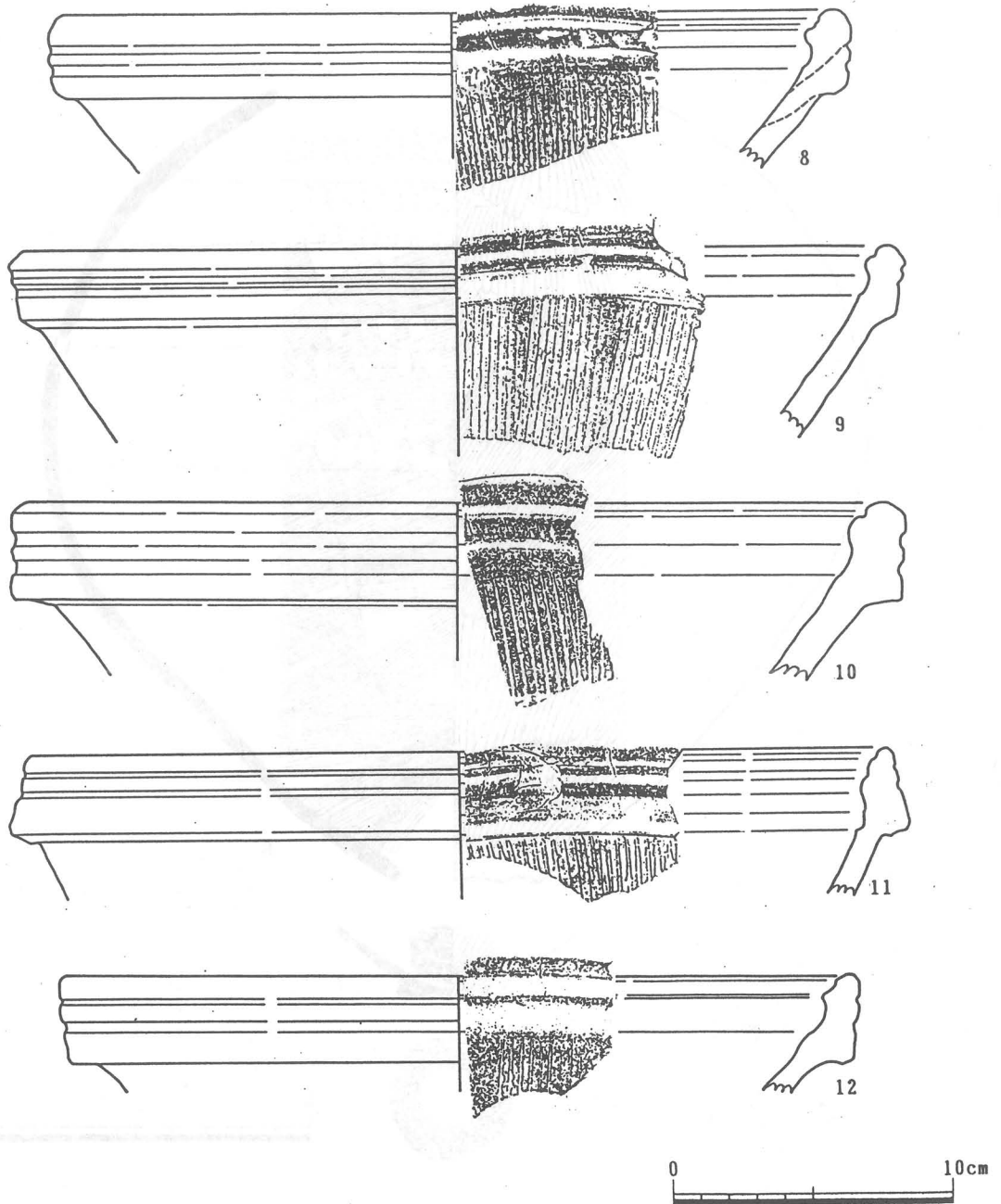
第11図 遺構実測図4 (土器棺4)



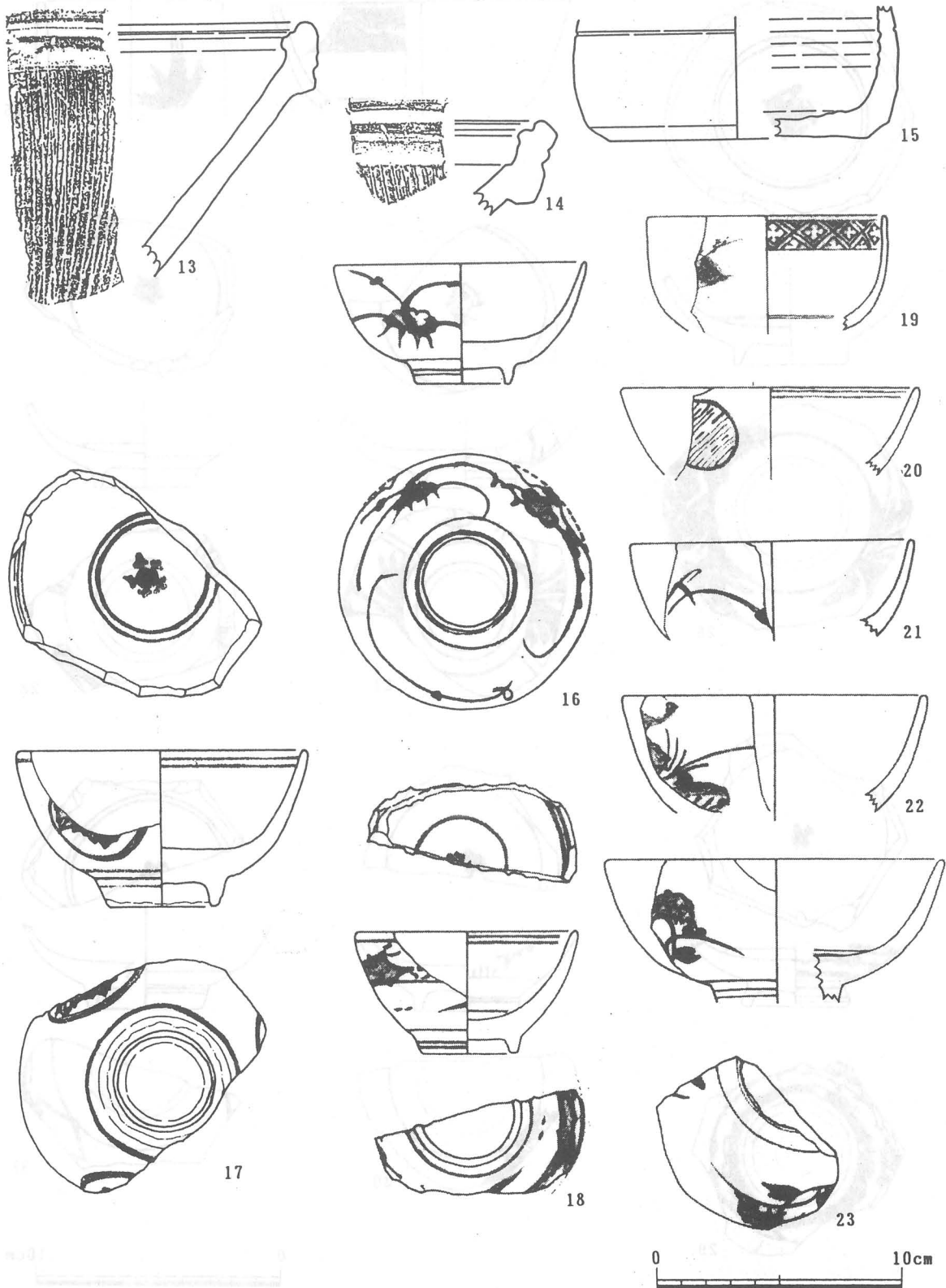
第12図 遺物実測図4 (土器棺4)

江戸土坑

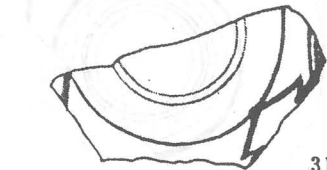
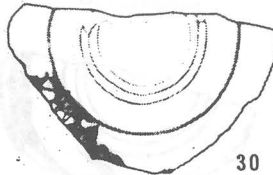
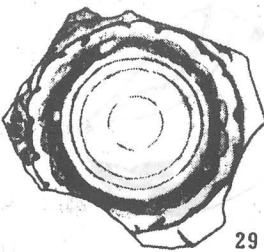
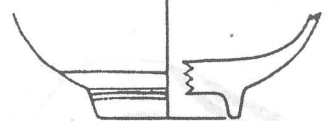
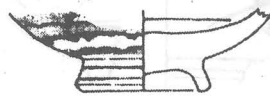
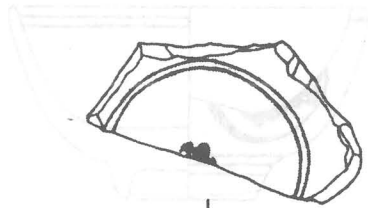
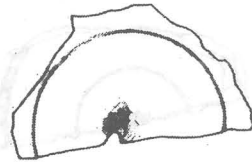
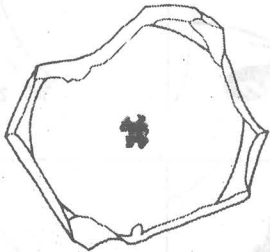
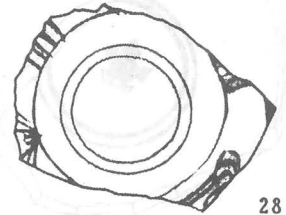
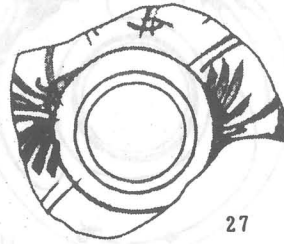
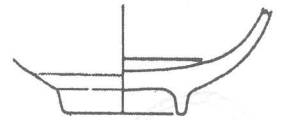
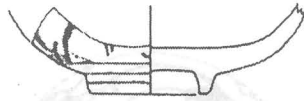
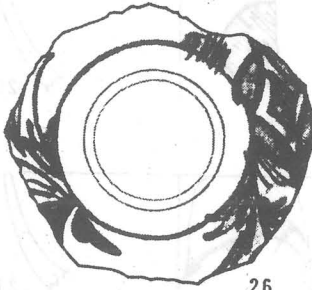
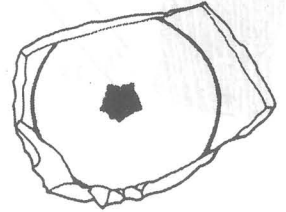
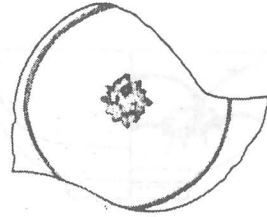
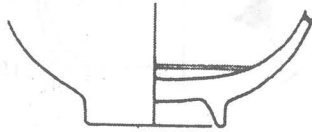
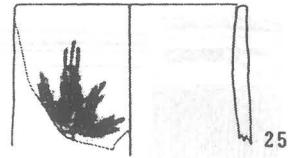
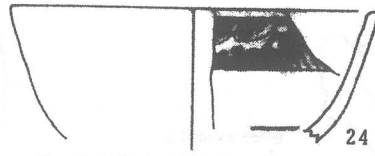
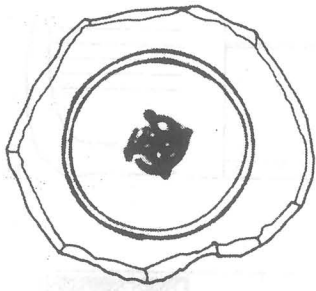
調査区北東隅で検出された。深さ30cmを測る。全体形は調査区外に延びており不明である。遺物は、備前焼8～15、伊万里焼系染付磁器16～43・54～56、伊万里焼系青磁44～46、京焼系染付陶器47～49、唐津焼系陶器50～53、瓦等が多量に出土した。遺物54～56は、碗の高台部を転用した面子である。これらの出土遺物から、江戸時代末のごみ穴と考えられる。



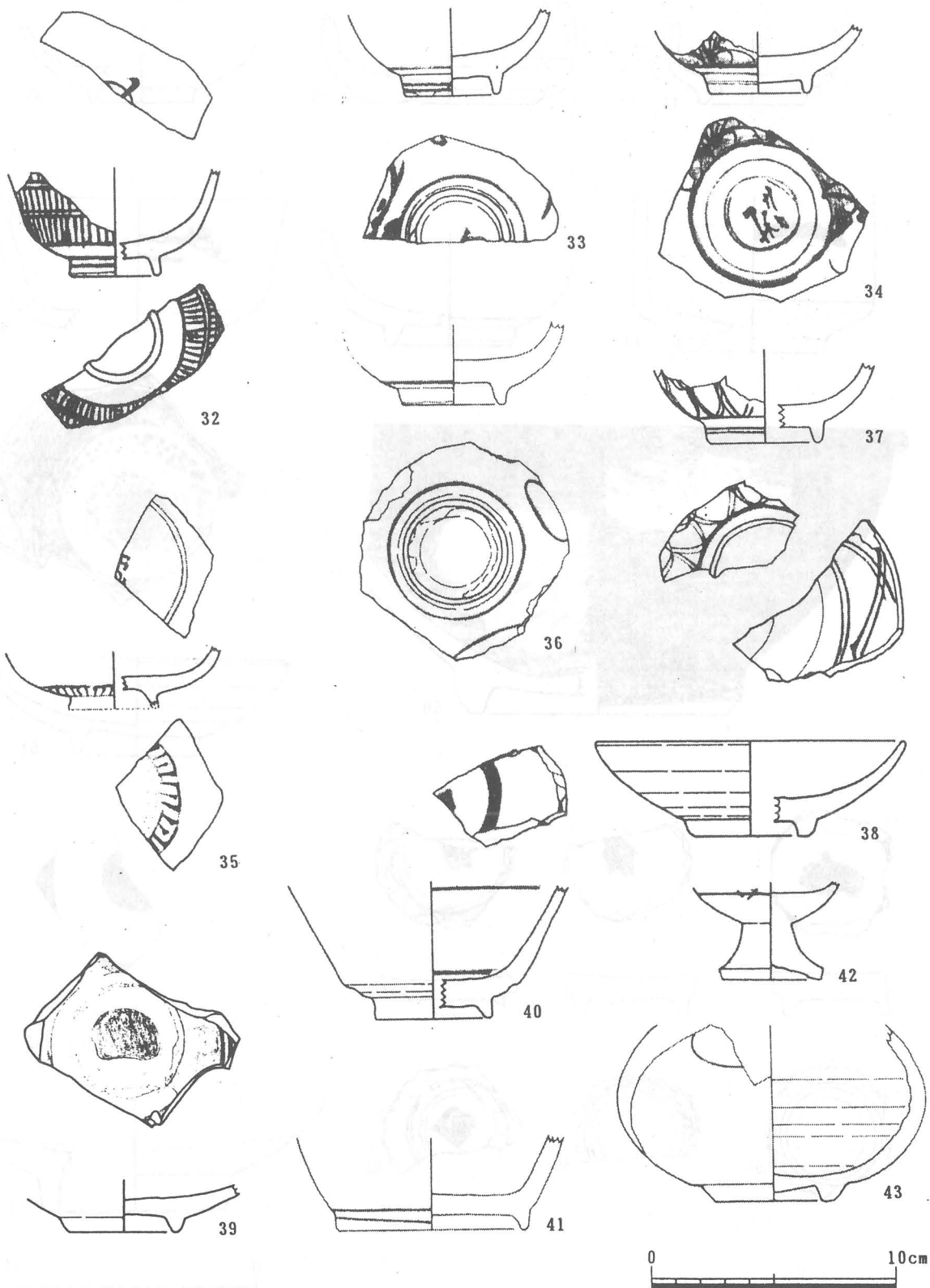
第13図 遺物実測図5 (土坑出土遺物1)



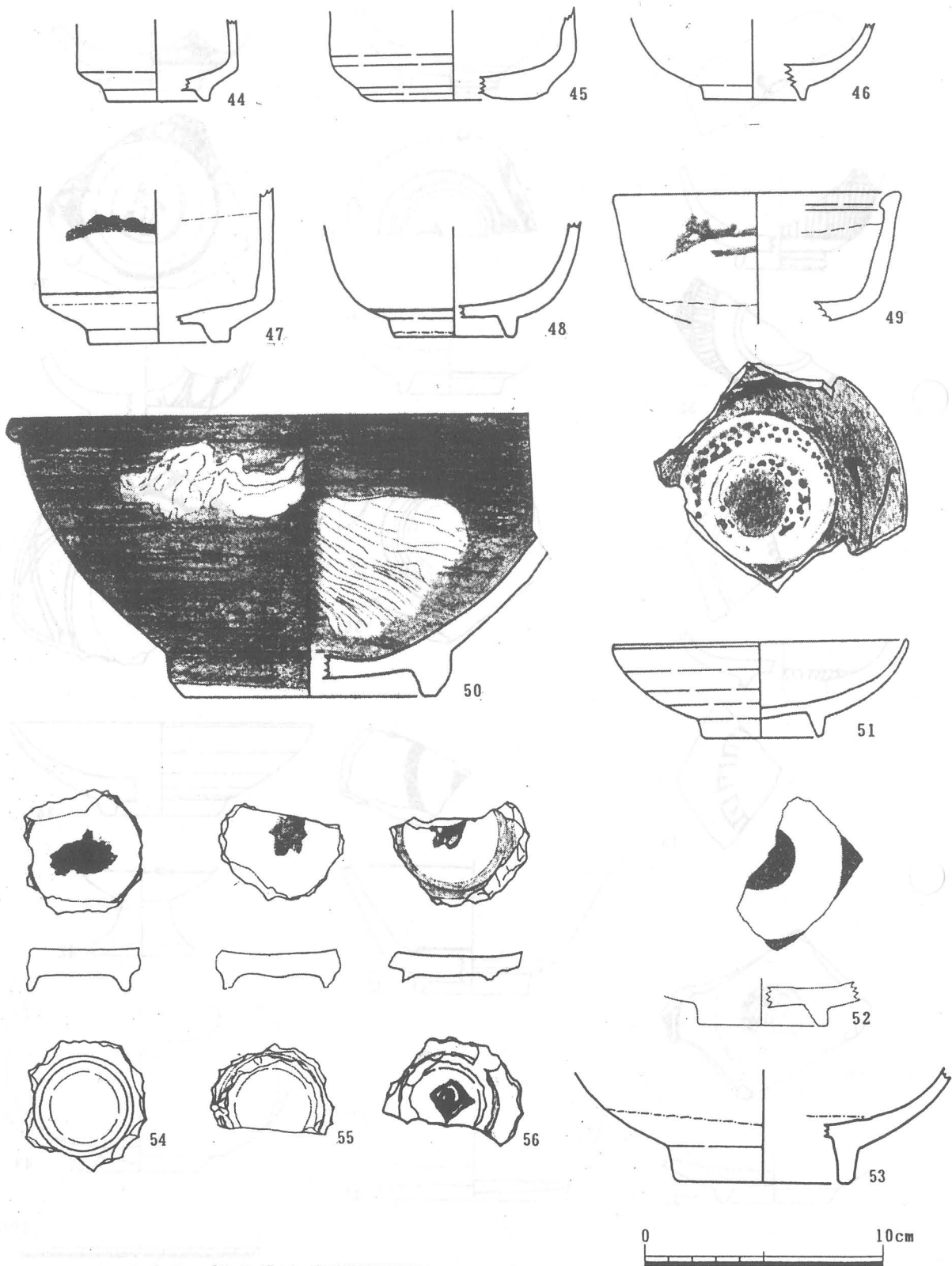
第14图 遺物実測図6 (土坑出土遺物 2)



第15図 遺物実測図7 (土坑出土遺物3)



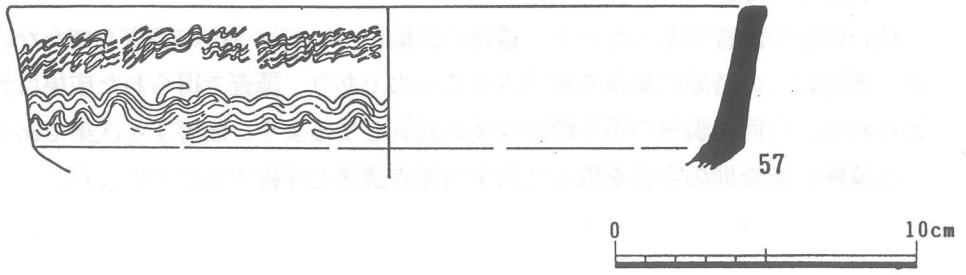
第16図 遺物実測図8 (土坑出土遺物4)



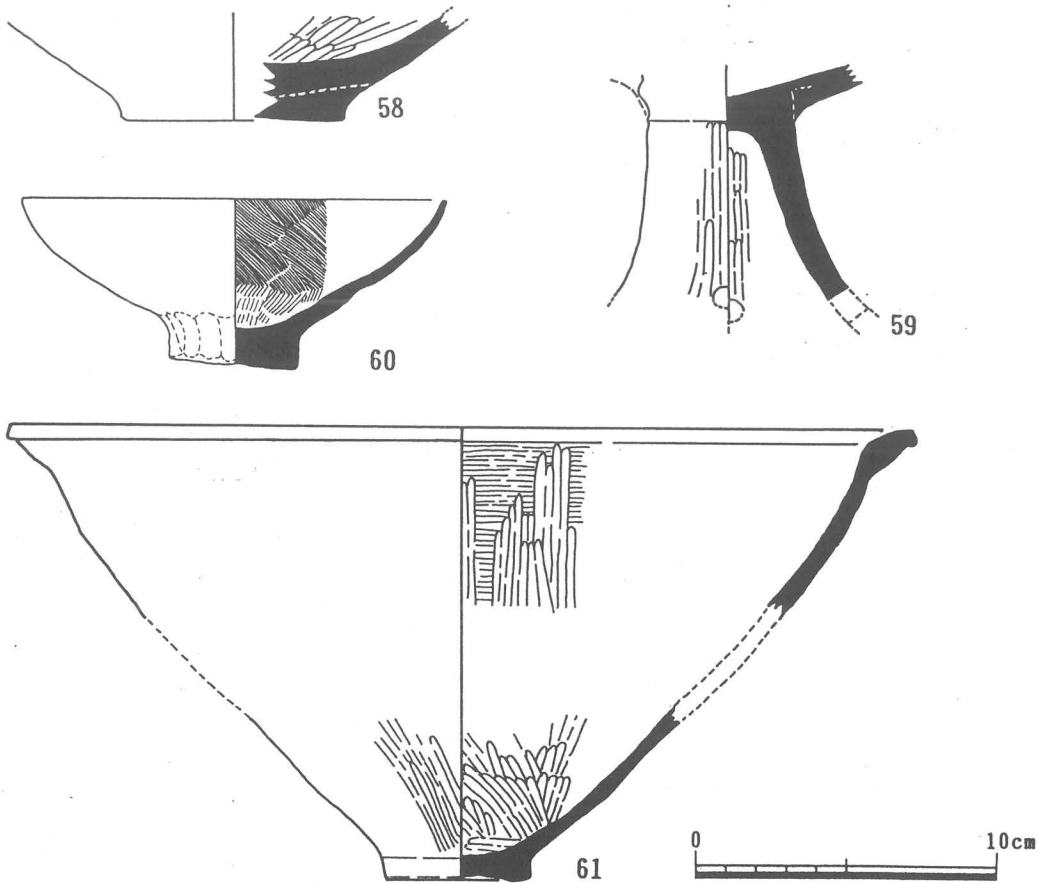
第17図 遺物実測図9 (土坑出土遺物5)

9. その他の弥生遺物

土器棺以外に、土器棺1及び土器棺4周辺から弥生式土器が若干出土した。
いずれも、土器棺と同時期の遺物である。



第18図 遺物実測図10 (土器棺1周辺出土遺物)



第19図 遺物実測図11 (土器棺4周辺出土遺物)

10. まとめ

今回の調査の結果、江戸時代末の土坑1基と、弥生時代後期の土器棺4基を検出した。

検出された土器棺は、いずれも大きさから幼児を埋葬したものと考えられる。また、土器棺3及び土器棺4の棺身に用いられていた壺は胎土等の観察から河内地方からの搬入品と考えられるものである。

狭い範囲の調査であったため、遺跡の詳細については今後の調査を持たなければならないが、周辺にこの時期の集落を想定させるものであり、調査で得られた成果は大きいものと考えられる。今回の調査の不幸を今後の教訓とするよう、痛感する次第である。

当遺跡は調査地の字名を取って常全日蓮寺遺跡と呼称することにした。

表1 弥生遺物観察表

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	調整	色調	胎土	焼成	備考
1	土器棺1	弥生土器 甕	最大径 42.4	内-上部へら削り、 中央部ハケ後へら 磨き、下部ハケ。 外-頸部ヨコナデ、 胴部へら磨き、底 部へら削り。	内外-鈍い橙色 7.5YR5.4	密。	良好	棺身 口縁部破却 黒斑
2	土器棺2	弥生土器 甕	最大径 52.9	内-上半部ハケ目、 粘土接合痕、指頭 圧痕、爪痕、下半 部ハケ後へら削り。 外-ハケ後へら磨き、 底部ナデ。	内-明褐色 ~褐色 7.5YR7/1 ~7.5YR4/1 外-褐色~橙色 7.5YR6/1 ~7.5YR7/6	1~3mm の小石粒 を含む。	良好	棺身 口縁部破却 胴部1箇所 穿孔 黒斑
3	土器棺3	弥生土器 鉢	口径 41.0	口縁部 内-へら磨き。 外-ヨコナデ。 体部 内-ハケ後細かいへ ら磨き。 外-ハケ後へら磨き。	内外-鈍い橙色 5YR7/4	0.1~0.3 mmの砂粒 を含む。	良好	棺蓋 黒斑
4		弥生土器 甕	最大径 44.3	内-上部へら削り、 中央部ハケ後へら 磨き、下部細かい へら磨き。 外-上半部へら磨き、 下半部細かいへら 磨き、底部ハケ後 ナデ。	内-褐色 10YR4/4 外-黒色 10YR2/1	密。 雲母を含 む。	良好	棺身 口縁部破却 胴部1箇所 穿孔 黒斑 搬入土器
5	土器棺4	弥生土器 高坏	口径 31.6	口縁部 内外-ヨコナデ。 坏部 内外-ハケ後へら磨 き。 脚部 内-へら削り後ナデ。 外-へら磨き。	内-褐色 5YR6/8 外-鈍い橙色 ~橙色 7.5YR7/4 ~5YR7/8	2~3mm の小石粒 をわずか に含む。	良好	棺蓋 脚部破却 黒斑
6		弥生土器 甕	最大径 47.6	内-上部指頭圧痕、 他はハケ。 外-全体にハケ後へ ら磨き。	内-黒色 10YR1.7/1 外-褐色 10YR4/4	2~3mm の小石粒 をわずか に含む。 雲母を含 む。	良好	棺身 口縁・底部 破却 胴部2箇所 穿孔 黒斑 搬入土器
7		弥生土器 甕	底径 7.2	内-ハケ。 外-磨き、底部ナデ。	内-黒色 7.5YR1.7/1 外-褐色 7.5YR4/4	0.1~2 mmの白色 砂粒を含 む。雲母 を含む。	良好	底部閉塞用 底部外面に 粉痕跡 搬入土器

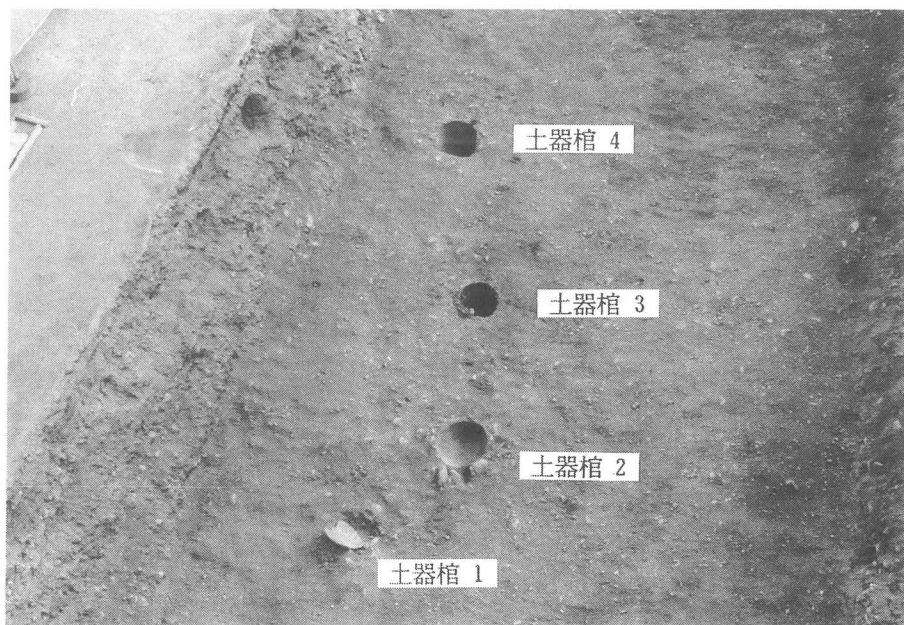
番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	調整	色調	胎土	焼成	備考
57	土器箱1周辺	弥生土器 壺	□ 径 15.2	内外-ヨコナデ。	内外-褐色 7.5YR4/3	0.1 0.2 mmの砂粒 をわずかに 含む。 雲母を含む。	良好	
58	土器箱4周辺	弥生土器 壺	底 径 7.2	内-ヘラ磨き。 外-摩滅のため不明。	内-灰黄褐色 10YR6/2 外-橙色 7.5YR6/6	1~2mm の砂粒を 含む。	良好	
59		弥生土器 高坏	—	坏部 内-ヘラ磨き。 外-ヨコナデ。 脚部 内-ヘラ削り。 外-ヘラ磨き。	内-橙色 5YR7/8 外-明赤褐色 2.5YR6/8	1mmの砂 粒を少量 含む。	良好	
60		弥生土器 鉢	□ 径 14.6 器 高 5.6	内-ハケ。 外-ヨコナデ。	内外-明赤褐色 2.5YR5/8	1~5mm の小石粒 をわずかに 含む。	良好	
61		弥生土器 鉢	□ 径 30.0	□縁部 内-ヘラ磨き。 外-ヨコナデ 体部 内-ハケ後ヘラ磨き。 外-上部ヨコナデ下 半部ヘラ磨き、底 部ヘラ削り後ナデ。	内-橙色 5YR6/8 外-橙色 5YR7/8	1~2mm の小石粒 を含む。	良好	黒斑

*番号は、遺物実測図と一致する。色調は、日本色研事業株式会社発行『新版 標準土色帖 1992年版』による。

圖 版



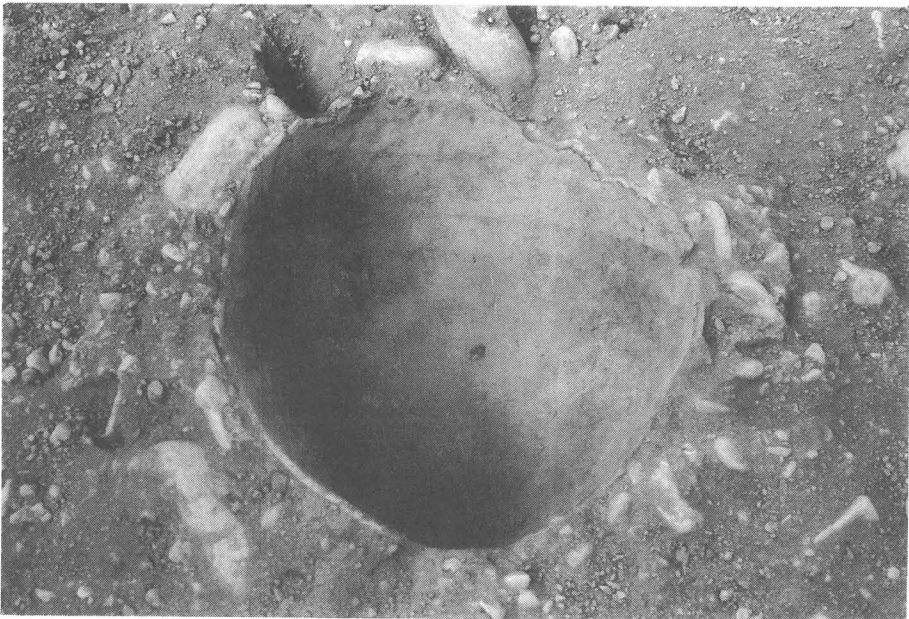
調査地全景（北から）



土器棺全景（北から）



土器棺1 検出状況 (西から)



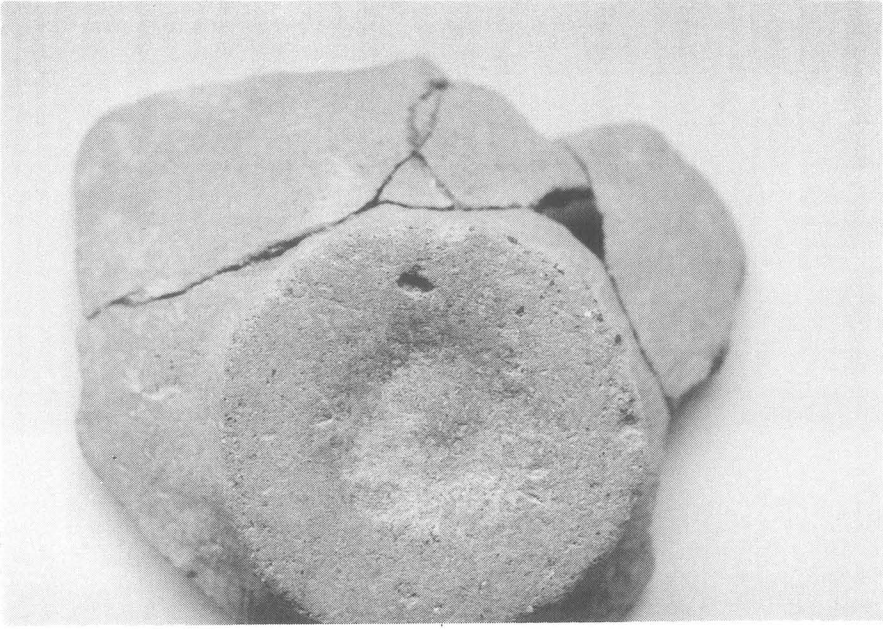
土器棺2 検出状況 (南から)



土器棺3 検出状況（北から）



土器棺4 検出状況（北から）



土器棺4底部粉痕跡



